

2022 年 5 月 22 日（日）「キリストが形成されるまで」

ガラテヤ 4:16-20

16 すると、私は、真理を語ったために、あなたがたの敵となったのでしょうか。17 あの者たちがあなたがたに対して熱心になるのは、善意からではありません。かえって、自分たちに対して熱心にならせようとして、あなたがたを引き離したいのです。18 良いことで熱心に慕われるのは、いつであっても良いことです。それは、私があるあなたがたのもとにいる時だけではありません。19 私の子どもたち、キリストがあるあなたがたの内に形づくられるまで、私は、もう一度あなたがたを産もうと苦しんでいます。20 できることなら、私は今、あなたがたのもとにいて、語調を変えて話せたらと思います。あなたがたのことで途方に暮れているからです。

マタイ 13:3-9

3 イエスはたとえを用いて多くのことを語られた。「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。4 蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。5 ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐに芽を出した。6 しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。7 ほかの種は茨の上に落ち、茨が伸びてそれを塞いでしまった。8 ほかの種は良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍になった。9 耳のある者は聞きなさい。」

【序論】

今日は、ガラテヤ書と並行して、主イエスの「種蒔きの譬」を朗読していただきました。この二つの箇所の中に何のつながりがあるだろうかと思われるかもしれませんが、共通する真理を読み取ることができます。ガラテヤという地に「パウロ」という農夫によって福音の種が蒔かれた。地に落ちた種は芽を出し、教会となって生長し始めました。ところが、まだ未成熟な段階で異なる教えが入ってきて、せっかく伸び始めていた芽を摘んでしまいました。この「異なる教え」とは「ユダヤ主義」と呼ばれるもので、「救われるためには信仰だけでは不十分であり律法の行ないも必要である」という教えです。このように、「種蒔きの譬」に照らして見てみると、ガラテヤ教会の状況が理解しやすくなるでしょう。種が落ちた地が「道端」であったか「石地」であったか、芽を摘んだ敵が「鳥」であるか「茨」であるかは様々に解釈できると思いますが、いずれにせよ何らかの問題がある土壌で育っていたところに、信仰の生長を妨げる何かがやって来たことは確かです。

【本論】

本論 1. パウロによる種蒔き

すると、私は、真理を語ったために、あなたがたの敵となったのでしょうか。(4:16)

パウロとは、福音の真理をガラテヤの地に届けた人であり、彼らにとって、永遠のいのちをもたらしてくれた恩師、あるいは「信仰の父」とも言ってもよい人物です。しかしながら、ここではそのパウロが「敵となった」と言われています。少なくともパウロには、そのように言わざるをえないほど悪い関係になっていると感じられたのでしょう。

「(真理を) 語る」という動詞 (ἀληθεύων) は現在分詞形であり、パウロが一貫して同じ福音を語り続けてきたことを示しています。

私たちが真理 (あるいは真実) を語るとき、それが必ずしも誰の耳にも心地よいものになるとはかぎりません。せつかく伝えても、かえって心が閉ざされてしまうこともあります。もちろん、一人ひとりに対して伝達の仕方は工夫しなくてはなりませんが、重要なことは「種を蒔き続ける」ということです。種が蒔かれなければ、その「地」に芽が出ることはないでしょう。

パウロによる最初の種蒔きには成果があり、ガラテヤの地に福音を信じる人々が興されていきました。しかし、その「地」には何らかの問題があり、芽があらぬ方向へ向かってよじれて行ってしまいました。

本論 2. ユダヤ主義者の熱心

あの者たちがあなたがたに対して熱心になるのは、善意からではありません。かえって、

自分たちに対して熱心にならせようとして、あなたがたを引き離したいのです。(4:17)

ガラテヤ教会の信仰の芽を曲げたのは「あの者たち」すなわち「ユダヤ主義者」です。彼らは、パウロが宣べ伝えた「信仰による義」を否定し、「行ないによる義」という石を上に乗せました。その石の重みで芽は上に伸びていくことができず、生長が全く止まってしまいました。

「あの者たちがあなたがたに対して熱心になる」と言われているように、ユダヤ主義者たちもある種の熱意をもってガラテヤの信徒たちに「ユダヤ教」を教えていたのでしょう。旧約律法を一から教え、それに従うように指示していた。その熱心さは、ユダヤ教徒時代のパウロを彷彿させるものでした。しかし、その熱心の行き着く先は神を迫害す

るという道であり、キリストのからだなる教会を傷つける結果に至ることをパウロは経験的に知っていました。

敵対者の行動について、パウロは「**自分たちに対して熱心にならせようとして**」と言っています。これは所謂「党派心」のことであって、違う教えを説く指導者が群の中に現れることにより、教会が分裂する危機を指摘しています。事実、ガラテヤの信徒たちは、もはやパウロの語ることに耳を傾けなくなっていました。

「種蒔きの譬」の「**茨の中に落ちた種**」を思い浮かべるといいでしょう。茨に囲まれると、真理が見えなくなってしまう。太陽に向けて自由に伸びていくことができなくなる。ユダヤ主義とはまさに「茨」となってガラテヤ教会に絡みついてきたのです。私たちの信仰生活にも、多種多様な茨が生えてくる危険性は常にあります。異端的な教えだけでなく、社会的風潮そのものが福音に生きる道を閉ざそうとするかもしれません。あるいは、私たちの聖書解釈を著しく曲げる思想が心に入り込んでくることもあります。それらを放っておかず、時には切り取り、火にくべることも必要かもしれません。

本論 3. パウロの熱心

私の子どもたち、キリストがあなたがたの内に形づくられるまで、私は、もう一度あなたがたを産もうと苦しんでいます。(4:19)

パウロは心からの思いを込めて、ガラテヤの信徒たちに語りかけます。「子どもたち」という呼びかけは父親としての愛情が感じられ、「あなたがたを産もう」という表現は母親としての苦悩が感じられます。ここで気になるのは、「産む」ということばが他の箇所ではキリスト者とすることを意味しているという点です。

- ・ **あなたがたに、キリストにある養育係が無数にいたとしても、父親が大勢いるわけではありません。キリスト・イエスにあって、福音を通して、あなたがたを生んだのは、私なのです。**

(I コリント 5:15)

- ・ **獄中で生んだ私の子オネシモのことで、あなたに頼みがあるのです。(フィレモン 10)**

これらの箇所に照らして考えると、パウロはガラテヤの信徒たちの信仰が失われてしまったと捉えているように聞こえますが、そうではないでしょう。彼らが依然としてキリスト者であることを前提として彼は語っているのです。しかし、ひとたび福音の恵みにあずかった人が道を踏み外したときに、もう一度正道へと導いていくことは、最初のまっさらなキャンバスに文字を書き込んでいくことにも増して大変な作業です。それでもパウロは、どんな苦勞をしてでもガラテヤの信徒たちをキリストの許に立ち返らせなくてはならないと、深い責任を感じています。

「キリストがあなたがたの内に形づくられるまで」とあります。これは、聖霊によって彼らがキリストとの生き生きとした交わりの内を生きるようになること、キリストが彼ら自身の内に受肉することを言い表しています。パウロは先に、自分自身がそのような体験をしていることを述べていました。

生きているのは、もはや私ではありません。キリストが私の内に生きておられるのです。

私が今、肉において生きているのは、私を愛し、私のためにご自身を献げられた神の子の真実によるものです。(2:20)

これと同じ事態がガラテヤ教会内に起きてくることを切望し、そのための労は惜しまないと言っているのです。

【展開】

今日は、ガラテヤ教会の状況を「種蒔きの譬」に照らして読み解いてみました。彼らの心の土壌は「道端」だったのか、「石地」だったのか、解釈は如何様にもできるでしょう。また、彼らの魂を奪い去ったのが「鳥」だったのか、「茨」だったのかも、どちらでもよい。重要なことは、彼らが一度信仰を持ったということであり、それは時に妨げに遭うけれども、再び主の許に帰ってくるに違いないということです。主イエスは「良い羊飼ひ」であって、一匹の羊のため、一つの教会のためにも、あちこち探し求めるお方です。信仰の道に迷ってしまったとき、よく心の耳を澄ませてみたい。自分を呼ぶ主イエスの声が聞こえてこないでしょうか。その声は聖書の中にあります。私たちを探し求める主イエスの姿が、福音書の中に記されている。そして、主は迷い羊を見つけたら、もう一度「良い地」に置き直してくださるはずです。主イエスの許にあって、その種は「百倍」「六十倍」「三十倍」の実を結んでいくことができるでしょう。

【結論】

最後に、20 節のパウロのことばを読んでおきましょう。

できることなら、私は今、あなたがたのもとにいて、語調を変えて話せたらと思います。あなたがたのことで途方に暮れているからです。

ガラテヤ教会のために「途方にくれている」パウロのうちに、私たちを探し求める主イエスの姿が見えてこないでしょうか。私たちは今、道に迷ってはいないか。自分自身の状態をよく見極めたいと思います。

【祈り】

良い牧者であられるイエス・キリストの父なる神様。私たちは迷いやすい羊であり、自分が今どういう状態にあるのかも分からなくなることがあります。安全な檻の中にいるのか、危険な道に迷い出ているのか。私たちの心に蒔かれた福音の種の生長を妨げるものを取り去ってください。律法的な考え方を捨て、恵みのみに生きることができますように。罪を離れ、聖い道を歩むことができるよう、常に助けてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
未開の地に福音の種を蒔き、救いの御業を始め給う、父なる神の愛、
いのちの種そのものとして、人の心の土壌を造り変え給う、主イエス・キリストの恵み、
罪、律法主義、悪しき思想の石を取り除き、豊かな実を結ばせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。